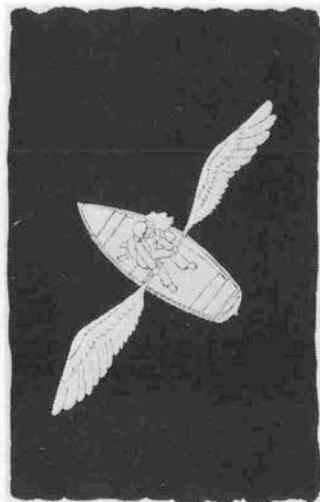


随想



カット/岡田 淳

●ポルトビアン・タナシヨナル
ジャズ・フェスティヴァルによせて

夏の世界的な

イヴェント

野口 久光

△音楽評論家



かつてはもっぱらダンス(ソシアル・ダンス)のための音楽だったジャズがコンサート・ステージで演奏され、音楽として鑑賞されるようになったのは一九四〇年代からのことで、その大がかりなコンサートを最初にジャズ・フェスティヴァルと称したのはアメリカ人ならぬフランス人だった。しかし、それを夏の野外の催しにして成功させたのは《ニューポルト・ジャズ・フェスティヴァル》をは

じめたジョージ・ウィーンである。天井が低く、あまり広くないジャズ・クラブ、むせるような煙草のけむりの中でナマのジャズをきくのが「通」だともいわれているが、今や夏の屋外ジャズ・フェスティヴァルは世界的な流行になっている。避暑地の海浜や湖畔で、昼間は日光浴をしながら、夜は星空のもとでジャズをきくのは実に健康的であり、今回の《ポルトビア・インターナシヨナル・ジャズ・フェスティヴァル》は心地よい海からの微風を肌感じながらジャズを心ゆくまでたのしめるという点で日本では嘗てない理想的なジャズ・フェスティヴァルとなるだろう。ついでに、ハリウッドの名所のひとつハリウッド・ボウルで二日間に亘って開かれた第三回《ブレイボーイ・ジャズ・フェスティヴァル》をきいてきたが、これが実にたのしい。有名な映画ス

ターの手型、足型とサインの刻まれたブレイトを敷きつめた前庭で名所になっているグロームズ・チャイニーズ・シアター(映画館)のあるハリウッド大通りからハイランド通りを北に向って十五分くらい歩いてゆるやかな坂を上って行くと左側に入口がある。公園地帯の自然の凹地を使用した野外コンサート会場で、二万人の聴衆を収容できるマンモス・コンサート会場である。初夏から九月下旬まで、ほとんど毎日コンサートが開かれているが、会場が広いためにクラシックのコンサートでもスピーカーが使われているにも拘らず音はかなりのいい。

ジャズ・フェスティヴァルともなれば、お客はカジュアルな軽装で、料理や飲み物を詰めた大きなバスケットなどをかかえてピクニック気分できている。午後二時半開演、夜の十時半すぎまで八時間余のあいだに十グループくらいが出演する。時間が長くてくたびれそうな気もするが、昼の陽ざしはかなりきついがひんやりとする山側からの微風も快く、夜は涼しくて気持ちよく、不思議なくらいつかれない。PAもロック系のグループの出しすぎはあるが快調だった。さきごろ日本で聞いたばかりの《ウェザー・リポート》がよかったし、リッチー・コールもたのし

つまずき 転びながら

三村 照雄

△ポर्टピア映画フェスティバル
実行委員会△



「ようやくここまで来た！」

フェスティバルの開催を目前に控えて、今の私の正直な気持ちです。

神戸——明治29年の11月に、花

隈の神港倶楽部において、わが国

ではじめて映画が上映された、映

画ゆかりの地。その神戸で開かれ

る博覧会に、何かひとつくらい映

画に關係のあるイベントがあつて

もいいんじゃないか。こんな考え

が私の頭に浮かんだのは一昨年の

11月のこと。それも同じやるなら、

企業や他の団体にお膳立てをして

もらうのではなく、我々市民の手

で、本当に映画が好きな人が集ま

って、企画を立て、準備をすすめ

て行こう。早速、私の仲間「神戸

映画ファンクラブ」の会員たちに

呼びかけたところ、「賛成！」「や

ろうやろう」の声のもと、この計

画は威勢よくスタートしたのです

根っから映画好きな仲間たちの

間で、ユニークな企画がポンポン

とび出しました。まず、神戸市内

の全映画館（41館）に投票箱を設置し、入館者に、好きな映画、監督、俳優を投票してもらう。各部門別にベスト10を集計し、その結果をもとに、外国映画、日本映画それぞれ10本ずつを、ポर्टピアランドの国際交流会館・メイシホールで上映する。「上映会には、上位に選ばれた監督や、男優、女優たちにも来てもらおう」、「松竹の寅さんシリーズのロケを、期間中、ポर्टピアの会場でやってもらうのはどうだろうか」、「学生の自主制作映画を集めたコンクールもやりたいね」etc.

が、現実とは厳しいもの。最初にひっかかったのは、おカネの問題でした。話が大きくなればなるだけ、フェスティバルにかかる費用もかさんで来ます。企画を持ち込んだ時点で、「それは面白い。うちとしてもぜひ後援したい」と

いつてくれた博覧会協会も、「おカネについてはノータッチ」と、すげない返事。「これは大変」と、資金の調達に走り回った結果、電

通がスポンサーを集めてくれることに、話がまとまりました。ところが、ホッとひと息の間もなく、今度は、神戸の興行界の方から、

「あまり派手にやられたら、地元の映画館の客をとられてしまう」と懸念の声。しかし、こちらの方も、神戸国際松竹の平木達雄支配

かった。二日とも真打ちはカウント・ベイシー・オーケストラで、日本ではほとんどP.Aを使わないこのオーケストラだが、P.Aを通すとレコードに近い音になり、ナンバー・ワン・スイング・バンドの実力をみせる。足の故障で車椅子を使っているベイシー・翁は相変らず元気いっぱい、今年の秋の来日が延期になったことをメンバーとともに残念がっていた。

《ポर्टピア》の会場は屋根つきだが、客席の廻りが吹き抜けになっているので野外と同じ気分できけるわけで、アメリカ遠征を果し、ロスでアメリカのミュージシャンで編成したオーケストラでのレコーディングをしてきたばかりの三木敏悟のインナー・ギャラクシー・オーケストラのこけら落とし出演に始まり、日本の第一線グループ、そして毎夜、スコット・ハミルトン、パディ・テイト、アル・コーンの三大テナーマンを中心とするコンコード・オール・スター・バンドに日本側から松本英彦、北村英治、光井章夫がゲスト出演する。そのジャム・セツションがフェスティバルのハイライトとなることは疑いなく、東京でもきけないこのイーヴニング・セットは今からのしみである。

★ポर्टピア・インターナショナルジャズ・フェスティバル 8/3(月)8/6(木) 国際広場



日本児童文学者協会
新人賞受賞式にて

5月に、日本児童文学者協会から、新人賞をいただきました。
この3年間に、『ムンジャクンジュは毛虫じやない』『放課後の時間割』『ようこそ、おまけの時

△児童文学・漫画家▽

岡田 淳

もらって
新人賞を

★ポトピア⁸¹映画フェスティバル
8/12(水)8/21(金)12時半と午後5時半の2回上映 国際交流会館
つまずき転びながらも、ここまで来た。私たちのフェスティバル。ひとりでも多くの人に参加してもらえれば、と願っています。
8/12(水)8/21(金)12時半と午後5時半の2回上映 国際交流会館

人の協力を得て、全面的なバックアップを得ることができました。何ぶんにも、ド素人の始めたことで、最初予算が大幅に削減され予定していたイベントがボツになったり、など、事が思うように運ばないこともありました。今もプレイガイドの前を通るたびに、デカデカと貼られたポスターの前に、「チケット売れてるかなあ」と祈るような気持です。

間に」(いずれも借成社)と、1年に1冊のペースで、児童向けの読みものを出してきて、去年の夏に初版が出た『放課後……』が、幸運にも受賞、ということになったのです。

そのしらせが新聞の片隅に載ると、「神戸っ子」編集部をはじめ、新聞の隅々まで目を通す習慣を持つらしい義理固い多くの友人から、お祝いの言葉をいただきました。その中に、こういうのがありました。

——今さら新人賞、おそすぎますやんねえ。

それは、友人中でも義理固さ最右翼の磯本くんのことばです。

——いやあ、そんなこともないやろけど……。

なにげなく電話でうけたえしたあと、待てよ、と思いました。

2年め、2冊めの本で新人賞、おそすぎるわけがないのです。それなのに彼がそう言い、ぼくもなかばうなずきながら聞いてしまったのは、理由のないことではないようです。

ぼくは、ずっとマンガを描いてきました。ずっと、といっても、最初のマンガ集『星泥棒』からだと15年、「神戸っ子」の連載なら13年ですから、たいした期間ではありません。しかし、児童向けの読みものに費した時間にくらべる

と、ずっと、ながいわけです。

おそらく、磯本くんが「おそすぎる」と言ったのは、マンガのほうの仕事も含めた期間を想定してのことだったでしょう。また、ぼくもそういう感じで、彼のことばを聞いていたのだと思います。

そう考えてみると、「おそすぎる」というのは、まちがいはあるにせよ、ひとつの真実を言いあてているようです。

というのは、ぼくは、マンガと児童書の仕事を、あまり区別して考えていないのです。

もちろん、作品のモチーフだとか、発表の状況だとか、かなりちがったところはあるますが、基本的な部分で、同じような創りかたをしているな、と思います。

ある児童書関係のかたのことばによれば、ぼくは、ファンタジーの作家なのだそうですが、きっとそのファンタジーの発想法と、ぼくのマンガの発想法は、密接に重なっているのでしょう。

そういう意味では、ぼくはマンガを描くことで、ずっと児童書のための何かを、たくわえてきたのかもかもしれません。これからも、ぼくは両方続けていくだろうと思います。いつか、両者の重なるあたりで、新しい仕事ができそうな……、予感もないではありません。

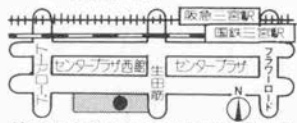
ま、ぼちぼちやります。

ファッションに
“贅”を尽くすのは素敵。
でも、
いつも美しく着ている
人はもっと素敵。



技術に贅を尽くしファッションを
常に美しく——ニシジマ

- 型くずれの防止 ●素材感の回復 ●カルテの作成
- お客さまのお好みに合せた仕上 ●ファッションクリ
- ーニングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
グレイス神戸B1 ☎ (078) 332-2440

新発売!

こうべサブレ

エトランゼたちに 愛されてきた
美しい港町 神戸
潮風に 髪をなびかせて
歩いた坂道
ふと出会った……
チーズサブレ——忘れがたい
そのデリケートな歯ざわり
異人館のある街 神戸



¥500・¥1000

北 欧 の 銘 菓
ユーハイム・コンフェクト

工場・橋内店 神戸市中央区橋内町1-8(南蛮美術館裏側) TEL 221-1164
大丸・そごう・阪急・神戸デパート・元町店

ある集い・その足あと

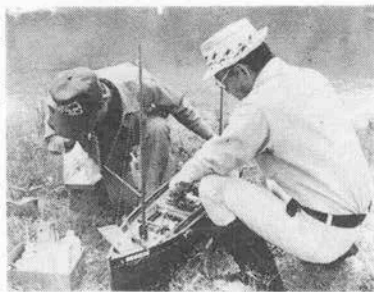
K.S.S.C. 〓 神戸スケールシップクラブ 〓

近藤輝男 〓 神戸スケールシップクラブ事務局 〓

船の好きな方は、相当多いと思います。模型の世界においても、帆船の好きな方、客船の好きな方、ヨットの好きな方と、千差万別です。そして、作ってスケール感を楽しむ方、動かして楽しむ方の二つのタイプに別れます。我々のクラブの基準は、必ず実物のスケール感を備えてなければならぬことと、実際にラジオコントロールで、走航しなければならぬということです。タグボートあり、客船、貨物船、漁船、外輪船、ヨット、クルーザーなど、はては潜水艦まであります。パワーブランチは、電池で動くもの、エンジン又はスチームエンジンと色々あります。特に多いのは、電動式とスチームエンジンを使用したものです。これには理由があつてまず一つには、騒音の問題があります。それとこの二つの動力が、スケールモデルに一番ふさわしいからです。

現在会員数は25名、その大半は40代以上の方です。職業はいろいろで、サラリーマンあり、運送屋あり、水商売ありとバラエティにとんでいます。皆、仕事の合間の休日を楽しんでおります。当クラブの例会は、月一回で神戸市内の池を利用して走航を楽しんでおります。のんびり椅子にすわって、

タバコを吸いながら、自分が苦労して作った船が目の前を波をかきわけ、煙をはきながら走航して行くのを見ると、ある会員は、「まるで自分の子供のようにかわいい」といいます。木を削り、穴をあけ表面を磨き、色を塗る。ひとつひとつの工程を工夫し、考えながら製作期間は、早い人で三カ月、半



半年がかりで作った大作。
(5月の例会、六甲まむし池で)

年から一年ぐらいかかるモデルもさらにあります。最近では、市販キットも多くなつてきて、たいいていの方が、まずキットの製作より始まり何隻か作ったのち、自作のものやキットの改造に入っていく。値段も数千円のものから、三十万円ぐらいの高価なものまで色々あります。特に、好んで良く作られるのが、古いタイプのタグボートや漁船なのです。これは、年令層

にもよるでしょうが、やはりノスタルジアな感覚が、モデルに求められるからだと思います。

何もかもがインスタント時代になった現在、特に最近の子供達は工作と言えば、プラモデルを買って、接着して「ハイ出来上り」。

これれば、自分で満足に修理が出来ない。大きくなって、クギ一本満足に打てるのだろうか？心配になって来る。今の大人達、特に戦中派以前の年代の人が、子供の頃には、こういった模型も満足に手に入らなかつたとよく聞かされる。子供の頃、スチームエンジンを買いに行ったら、当時のサラリーマンの月給ぐらいの値段が付いていた、とある人はいう。そんな子供の頃の夢を、今現実には、楽しんでるのである。最近、当クラブも、序々に、若い人も増え、老若和氣藹々である。月一回、弁当飲料を持って、会場の池へやって来る。「今日は、新式の進水式をやるよ。シャンペン持って来たよ」今日も、天気は晴天。青空の下で船談議に花が咲く。「今日一日楽しむぞ……」そんな楽しい楽しいクラブなのです。

もし、この本を読んでいる方で「オレもやってみよう」と思われる方は、「神戸スケールシップクラブ事務局」(株星電社内)まで、お問合せ下さい。今年はお正月に、お正月で生まれて育った船キチが、今後とも末永く仲良く出来る仲間であらいたいと思います。

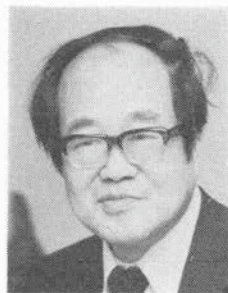
神戸スケールシップ事務局/近藤輝男
株星電社三宮本店6Fラジコンコーナー
☎39118171(大代表)

□エッセイ□

『夕暮れに苺を植えて』を
書き終えて

足立 卷一

〈作家〉



このたび公刊した『夕暮れに苺を植えて』の前半は、『神戸っ子』編集長小泉康夫氏が発行していた月刊雑誌『オール関西』に津高和一氏の挿絵で連載した。その第一回は昭和四十八年十月号であつたから、連載をはじめてから足かけ九年で、やっと一冊の本になったことになる。その間、いろんな曲折があつた。『オール関西』が五十年六月で休刊となつたため、中絶した。すると、歌誌『六甲』を発行していられる山本武雄氏が見かねてのことであろうが宮崎修二郎氏を介して同誌に続稿を連載する機会を与えてくださった。そして五十四年九月に一応連載を終え、あとは補筆に時を費した。怠け者のうえに雑事の多いわたしにとって、そうした神戸の人たちの厚意がなかったら、とても書き上げられなかつただろうと思う。まず、そのことにお礼を申しあげねばならない。

この伝記は、わたしが関西学院中学部の生徒だつたころの、石川乙馬を筆名とする恩師の生涯を綴つたものである。石川先生は真の教育者であるとともに万葉調の歌人であられた。早く父に死に別れたわたしは先生を父のように思つて敬慕し同時に文学・人生について最初に教えられた。やがて、わたしは先生のような教師となりたいと願ひ、先生の母校神宮皇学館にはいり、後半生の方向がきまつてしまつた。先生はわたしにとって生涯の師父であられた。先生がなくなられたのは昭和十一年、四十二歳である。

先生の伝記を草するのには、家族だけでなく、先生にかかわりのあつた多くの人たちのことを調べなければならなかつた。それがなかなか厄介であつた。それに、先生の暗部や弱点にも触れねばならなかつた。きれいごとでは実伝とならない。

そのためには少なからぬ心の痛みをおぼえた。墓あばきではないかと自責された。それで書き悩んだことも一再ではないが、そのときはいつも先生の温顔を脳裡に思い浮かべた。お前の気のすむように書けばいいよ、というお声がもれる思いで、何を書いても先生は許してくださるような気がした。もちろん、身勝手にすぎないであらう。でも、それでも思わなければ筆は進まなかったのである。書き終えて、わたしは先生にお許しを乞うた。

そうしてやっと本になると、いろんなかたがたから手紙をいただいたが、もっと早く聞いておけば本文に書きこむのだったのと思うことも少なくなかった。先生は宮城県の築館中学校を卒業されたのだがそのとき池内儀八という中学教師の家に寄宿せられ、儀八の長男龍男さんと同級生になり、兄弟のようにいっしょに暮らしたという。その龍男さんはいまもお達者で、便箋十枚に細字でびっしり書きこんだ手紙をくださった。その文面がすべて石川先生の思い出だった。

作文で「山」という課題を出され、みんないろんな実在の山を書いたのに、先生ひとり「一山ひとやまいくら」という山もある」と書き、講評でこっぴどく叱られたという。というのも、築館中学校にはいる前、先生は東京の叔父の店にあずけられ、ミカンを一山いくらで売っていたかららしい。この挿話も先生の生い立ちを語っているように思う。

また、ダラ池という水の張る池があり、石川少年は遊んでいるうちに氷が破れて大騒ぎしたことがあり、その模様が生き生きと書かれていた。これも書き入りたい話であった。

箕面自由学園校長の矢内正一先生は、関学中学

部の先生をしていられたとき、石川先生と隣り同士に住んでいられ、それだけに交際も深かった。矢内先生は石川先生の思い出をこまごまと書かれたのち、「病氣になられて老いたお母さんがあり、まだ若い妻があり、幼い一人息子のあった先生がどんなに苦悩されたか、その心事を思うと、さぞつらかっただろうな」としみじみ思わないではいられません」と述べられた。さらに、はじめにできた女の子が幼没したとき、石川先生の母堂は骨壺に手を差し入れて骨を愛撫され、石川先生は堪えられなかったと矢内先生に語られたそうであるこの話も痛ましい。

畏敬する松田道雄先生からお祝いの手紙をいただいたことも実にうれしかった。「一生に一冊しかかけないでしよう」と言ってくくださった。

「……石川先生の生きた時代が実によくうつされています。私はこのごろ昭和のはじめに、^はやったマルクス主義は、その後真実性を失ったかもしれないが、あれにひかれた人間のほうにあった心情は真実だと、お題目のように考えています。まことな人間がそれにまきこまれないでいられなかった時代の流れを、あなたは発掘してくださいました。恐らくご本は教師と生徒との人間的つながりの美しかった時代のあかしとしてこれから人の口へのぼると思いますが、私はむしろ大正・昭和の精神史として、かかれるべくしてかかれなかったものの誕生として祝いたいと思います」

過分のおことばとは重々承知しながらも、わたしが伝記をつうじて書きたかったのもそういうことだったので、まことにありがたかった。

※足立巻一著『夕暮れに花を植えて』は新潮社刊、千円

トランペット片手にブラジル一人歩き(6)

「神のみぞ知る」(ロバート・ミッチェム 主演)で

トリニダッド、トバゴ島へ

ロケの旅

右近雅夫(在ブラジル・サンパウロ/絵も)



在伯二年目を迎えたある日、二十世紀フォックス社からロケに出演する日本人のエキストラを募集に来ていることを聞いて、早速応募して見ることにした。

映画は、ロバート・ミッチェムとデボラ・カー主演の「神のみぞ知る」という題名で、第二次大戦中の南太平洋の孤島が舞台であった。エキストラには、日本の兵隊の役をする元軍人を求めているのだが、偶然シナリオにラッパを吹く場面があったので、幸運にも僕は採用OKとなった。そうして数日後、テストをパスした五人の元軍人さんと共にロケの目的地、中米カリブ海に浮ぶトリニダッド、トバゴ島に向け出発した。

トリニダッド、トバゴ両島は、その当時未だ英連邦に属しており、我々が訪れた一九五六年頃にはまだ日本の領事館すらなく、恐らく島民にとっても戦後初めて島を訪れた日本人だったのであろう。トランペットのケースを下げて、強烈な朝日に輝やくポート・オブ・スペインの空港に降り立つと、島の新聞記者達にインタービューされ面喰ってしまった。ここからローカル線の小さな飛行

機に乗り換え、間もなく芝生の滑走路のあるトバゴ島に着いた。僕等は、フォックス社差し廻しの車でカリブ海の海岸に面したこじんまりしたホテルに案内され、ロケの期間中滞在することになった。

我々が島に着いた時は、まだ主役二人だけの場面の撮影が始まったばかりで、僕等は海水浴をしたり、ホテルでぶらぶらして毎日を過すことになった。もちろん遊んでいても高給がもらえたのでそれにこしたことはないが、二、三日もすると手持不沙汰になってきた僕は、朝早くからホテルの主人のルックさんが市場へ車で買い出しに行くのを手伝ったり、料理の上手なミセス・ルックにケーキの作り方を教わったりして暇をつぶした。

週末になると、僕等の担当のミスター・ハロルドが、土曜の晩、スタッフの泊っているホテルでダンス・パーティーをやるので、僕にトランペットを吹いてくれと頼みにきた。ロケ班の即席バンドはカメラマンがピアノをやり、自作のベニヤ板でこしらえたコントラバスを弾く大工方、それにギターとドラムがあったが、音楽器が一本加わると

ちょっと恰好良くなった。パーティにはJ・ヒューストン監督やデボラ・カーも現れ、大いに賑ったが、お蔭でエキストラの仕事が終ってからも、僕は土曜のパーティのためにロケの終るまで三カ月間、島に残されることとなった。

ところで、島には小さなアイスクリーム屋が一軒あり、メイリンという中国系の可愛い娘がいたが、僕等は良くその店へアイスクリームを食べに行った。さてロケもいよいよ終末に近づき、日本軍が島を爆撃して上陸作戦を展開するシーンの撮影に入った時、その他大勢の日本兵に扮するため島在住の中国人がエキストラとして動員された。ところが、その日のためにわざわざハリウッドから派遣されて来た爆薬の専門家^{エクスパート}が、過まって予告なしに一斉に爆発を始めたのでロケの場は右往左往の大混乱になってしまった。騒動が一応治まった頃、何だか臭い匂いがして来たので、横手を見ると、椰子の木蔭で日本軍の軍服を着たメイ

リンの父親のアイスクリーム屋のオッサンが、爆発の際ズボンの中にもらした大便を仲間にトイレットペーパーで拭ってもらっていた。それ以来、僕は彼の店にアイスクリームを食べに行く気がしなくなった。

トバゴ島の住民の大半は黒人だが、僕等が島へやって来た当初は、日本人に反感を持っていたのか、我々は「オウ、ジャップ！」といってよく罵られたものだ。そのことをホテルの主人のルックさんに話すと、彼等は第二次大戦の時、アメリカの軍艦に水兵として乗り組み日本と戦ったので、いまだに敵愾心を抱いているのだろうと答えた。やがて十二月になると島の公会堂で慈善^{チャリティ}ショウが催され、我々ロケ班のバンドも特別出演することになった。その当時島で流行していた「ジーン・アンド・ダイナ」というカリブソを僕等が演奏し出すと、島民達は熱狂し、一緒に歌い出し、何度もアンコールさせられた。

翌朝、ホテルの近くのヴィラを一人で散歩していると、以前僕等を「ジャップ」と呼んだ黒人達がやって来て「Mr. DICKSON」と呼ぶので、何事かと思って立ち止ると、昨日のショウのカリブソがたいへん気に入ったらしく「今まで日本人といえど好戦的で野蛮な人種と誤解していたが許してくれ」というなりお互いに肩を抱き合い、かたい握手を交した。

やがてロケも終り、トバゴ島を飛び立つ日になると、ルックさん一家をはじめ緑の滑走路には大勢の島民がおしかけ、お互いに別れを惜しんだ。



ロケでトバゴ島を訪れたデボラ・カー（1956年、筆者撮影）

日本とスパゲティ

さて、スパゲティが私達日本に普及したのは、戦後であります。アメリカの駐留軍がもちこんで参りました。彼等は何百人もの調理をまかなうため、大量のスパゲティをいっときにゆで、サラダオイルをまぶして冷蔵庫に保管しておき、必要に応じてケチャップをまぶして油炒めしたり、皆様よくご存知のミートソース等のソースをぶっかけて食べておりました。その調理方法が、私達の間にひろまり、あたかもスパゲティとは、そういう調理方法しかないんだという、とんでもない誤解を招いたまま現在に至っております。

きっとほとんどの方がナポリタンとかイタリアンとか称して、スパゲティを調理してらっしゃいませんか？

ある日本人がナポリに観光に行って、レストランで、「ナポリタン」とオーダーして恥をかいたそうです。ナポリタンとかイタリアンとかいう命名は、日本の業者が本場イタリアに何の相談もせず勝手につけたものですから、念のため！

東京・渋谷 スパゲティ専門店



壁の穴

<三宮店>

中央区三宮町1-5 サンロイヤル神戸10F (さんプラザ)

T E L 078-332-4551

営業時間11AM~9PM 第1・3月曜休

※いよいよ7月2日京都店がオープンいたしました。四条河原町高島屋7F。京都におこしのせつは是非お立ち寄り下さい。

旧兵庫県庁舎とその保存

足立 裕司

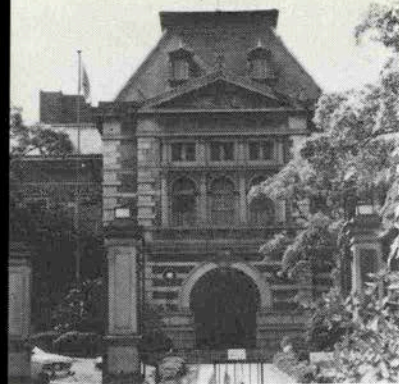
△神戸大学工学部建築学科助手（建築史専攻）▽

旧兵庫県庁舎（兵庫県南庁舎）

は明治三十五年に竣工した兵庫県における代表的洋風建築である。

今、この敷地に南庁舎の取り壊し移転を前提としなければならぬようなオペラ・ハウス、生活文化ホールの計画が進められていると聞き、唖然としてしまった。なぜなら、取り壊しは言語道断のこととして、移転するにしても、八十年間も県民に親しまれてきた建物とその土地から切り離し、別の土地に置くことなど、ほとんど破壊することと同様であると思われる。南庁舎が姿を消せば、どれだけ県庁周辺の風景が寂しくなるか想像していただきたい。

堂々とした風格の兵庫県南庁舎

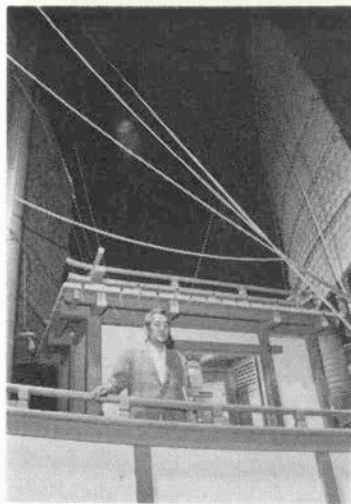


この建物にかぎらず、歴史的な建築物はその場所に固有の趣きや落ちつきを与えるという環境形成上の重要な働きがあり、又、長くその場所にあることによって、さまざまな出来事や出合いの場、背景として人々の心の風景を構成する大切な要素なのである。特に、石やレンガ造の建物は年とともに味わいを増し、心をこめて維持していくなら非常に長い生命をもつものである。日本にはヨーロッパのように建物を愛し、長く活用しているという姿勢がないことは残念なことである。このことは、絵や彫刻には理解をしめしながら建築や都市景観には、まったく無関心な日本の知識人、経済人等の態度と軌を一にしているように思われてならない。確かに建築は実用という基盤の上に成立するものであるが、その価値は他芸術に優るとも劣らない、都市文化の指標である。その意味で移築すれば事足りるという考えは、建物の存在価値を矮小化した安直な文化行政といわれても仕方がないであろうもちろん、この建物自体の歴史

的文化財としての価値は疑いようのないものである。イタリアの諸都市に発ったルネサンス様式が十六、十七世紀を通じてフランスで展開をとげた形式をこの建物は汲んでおり、過剰な装飾効果を廃し、実用を重視した、比例、調和のとれた建築である。その特色ともいうべき丸く、やわらかいファサードのドームは戦災で失われたものの、躯体の壁面は良く保存され、今後、十分使用に耐えることができるものである。

作者の山口半六は松江藩の出身で青年時代フランスに学び、幅広い能力を身につけた建築家である。しかし、建築家としてはこれからという四十二才で逝去したため、作品の数は少なく、この庁舎は彼が亡くなる直前に設計した代表作である。彼はこの建物の完成を見ることなく世を去ったため、死後、秋吉金徳の監督によって完成されている。

このように、建築学上もしくは都市環境上重要であるばかりか、県政の象徴ともいうべきこの建物を県当局自身が無視することはできないはずである。本建築は異な地域文化を有する兵庫県民の生活文化の資料保存と展示を兼ねた郷土館などとして、この場所において永く活用していくことがもつとも妥当な方向ではないだろうか。



文化を運んできた遠唐使船。歴史の鍵がここにある。IBM館

邦光史郎

〔作家〕

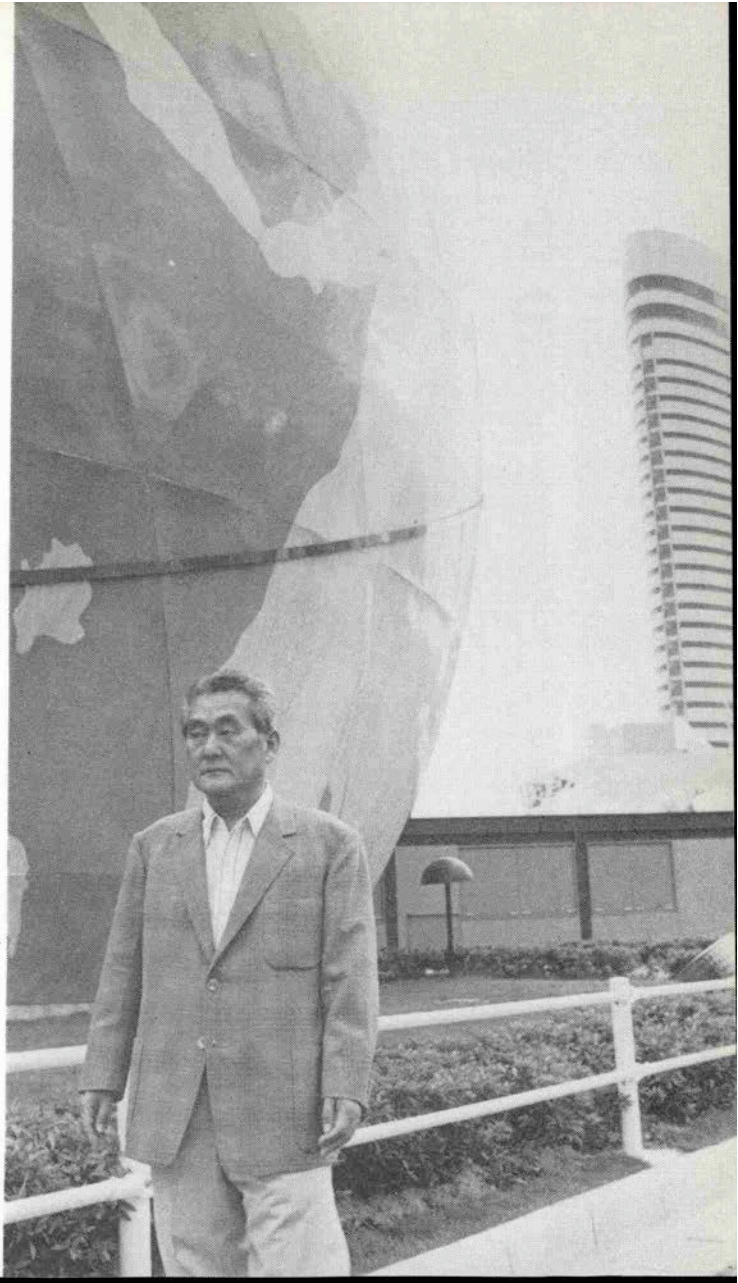
ポートピア見聞録

神戸は、夢をつくるのが上手な都市である。
夢のかけ橋、異人館めぐり、海釣り公園、百万ドルの
夜景、etc.

そうでなくても、帯のように細長い市街の、北には山
垣が、南には海を控えて、ふたつの特性をうまくミッ
クしたユニークな港湾都市として知られている。

神戸は、土地そのものが狭いという自からの宿命をは
ね返そうとして、昔から人工島づくりに励んできた。

それも平清盛が、和田岬に経が島を築いて、吹きつけ





兵庫ならうコーナーには各地を代表する美人が花を添える。思わず顔がほころぶひととき。兵庫縣館

る風と波を防ごうとした、その平安末期から、すでに人工島構想を展開していたのだから、年が入っている。兵庫開港をした幕末の頃にもやはり埋立地をつくっているが、以来百年間、山を崩してはせつせと土地づくりを精を出した。

それは山地を拓いて町をつくり、その土で海を埋めて市域をひろげるという、正に一石二鳥の構想によるもので、昭和四十一年から着手して、昭和五十六年に完成したのがポートアイランドである。

二十一世紀の新しい海の文化都市を目指すこのポートアイランドは、東西三キロ、南北二キロ、周囲十四キロあるという。これだけの敷地に、埠頭や港湾やマンショ

ンや学校、病院をつくるぐらいのことはどの都市でもやるだろうが、夢づくりのうまい神戸市は、そこにポートピアという博覧会場、夢の祭典をつくり上げた。

二

万博会場の三分の一とも、人によっては四分の一の規模ともいっているが、万博はあまりにもダダっぴろすぎた。その点、ポートピアは全体がコンパクトで、機能的にできている。

正面玄関ともいうべき中央ゲート附近は、なかなか堂々とした構えで、博覧会期だけでは勿体ないくらいだ。この会場で、何よりも真っ先に目につくのが、神戸ポートピアホテルである。まるで超豪華客船の煙突のような形をしているが、ポートピア全体を船と見立てると、そり立つ煙突は、一つのシンボルになりうる。

もともとが人工島なので、市内から橋を渡って導かれて行く感じが、いかにも海上都市の誘導路といった趣きで、明るい気分にくれる。

たまたま筆者が訪れた時は、いつもの半分くらいの入場者数とかで、どのパビリオンも、そんなに待たずに入れた。

ガイドマップを片手に、さてどこから廻ろうかと額を集めて相談している家族つれもあれば、上映時間のスケジュールをしらべ上げて、AからBへと効率的に廻る一組もあって、さまざまである。

中央ゲートを入った取っつきにあるのがテーマ館で、造形作家の作品展示がたのしい。天皇陛下も刷り立ての版画をもらってにっこりされたそうだが、海の文化都市のビジョンが所狭しとちりばめられている。

第二会場ともいうべきハイオース劇場では、観客も画面に参加でき、舞台中央に並べられた二十六インチのブラウン管六十四個に一組づつの観客が写っている。映像を主体としたパビリオンは他にも多く、このあた



屋外ステージはヤングでいっぱい

りは万博の後遺症のような気がする。

半球状のスクリーンに、巨大な映像が映し出される神鋼ポートラマも、めまいのしそうな画面だが、みどり館などは全体が潜水艇仕立てで、観客席がそのまま海底に入って行くような感じで設営されている。

正面に三つのスクリーンがあって、三台のカメラによる映像が展開されて行く。艇長の声が「エンジン始動」



コーヒー史通になれるUCCコーヒー館にて

「微速前進」と場内にひびくと、座席が、左に右にと揺らぎはじめ。

海面すれすれから水中に潜ると、例によって魚の大群や鯨に出会うことになる。

そして海底火山の爆発を、いかにくぐり抜けて水上に戻ってくるかという、十五分間の海底の旅は、涼味にみちていた。

映像の中では、ダイエーの体験劇場が、圧巻である。直径二十三メートルというドーム状のスクリーンが、そのまま発射台になっていて、観客は自分たちが宇宙へ飛び出して行くのかと錯覚するくらい迫真力にみちている。

とにかく超特大のスクリーンで、映写機の方も超大型なら、フィルムも巨大で、帯のようなフィルムがぐるぐると廻っている映写室のありさまを、ガラス窓越しに見ることが出来る。

宇宙から地上へ、さらに海中へ、そして白銀の世界へと、息つく暇もなく映像が飛躍する。

それは、見る者を宇宙へつかみ取って、これでもかれでもかと、見せつける感じで、いささか疲れる。しかし迫力は抜群であった。

三

博覧会場は、パビリオン見物ばかりでなく出会いの場でもある。

各種の催しが行なわれる会場もあったが、小じんまりした野外ステージをもっているUCCコーヒーの屋外イベント広場が、多くの人を集めていた。

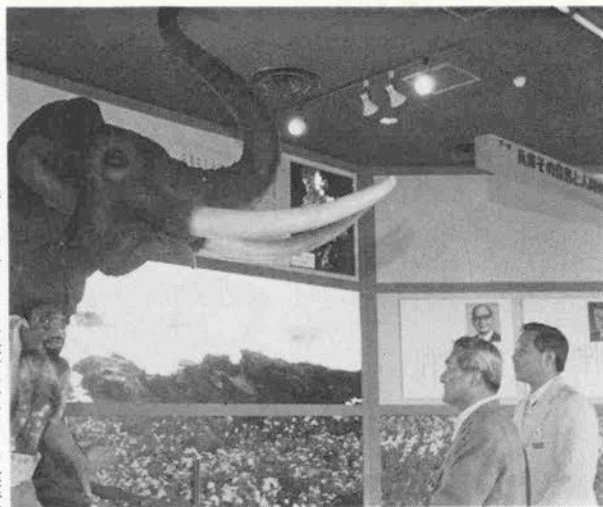
素人だというUCCガールズのタレントがこの日のダイナミックな歌と踊りに観客は惜しみなく拍手していた。

UCCコーヒー館は、コーヒーの歴史と、日本とのつながりを、美術品や、歴史的な器具、あるいは人形、そ

の他を巧く組み入れて、ぐるりと一まわりしているうちに、一かどの“コーヒー史”通になれるような仕組みになっている。コーヒーカップを模したパビリオンの造形も、子供たちに親しまれているという。遠くからでもすぐ分って、迷わずにたどり着ける所が妙である。

サントリーのウオーターランドも、水をテーマに、さまざまな工夫をこらしている。

水とは直接あまり縁のなさそうなIBMが出版しているのは、“遣唐使船”で、史料にもとずいて、実物そっ



ナウマン像と明石原人…兵庫縣館にて

くりの船をつくり上げた。何しろ一隻五千万円の建造費というから、大物である。全長二十メートルの遣唐使船が、館内を圧するように据えつけられ、観客は、その雄姿を仰ぎ見るだけでなく、船内へ入って、当時使用したろう要具を眼にすることができ

る。動きはしないから、当時の航海を体験はできないが、地上十三メートルもある帆柱には、網代でつくった帆が下げられている。百二十人から百四十人もの大使の一行

と乗組員との居室はどこにあったのか、その辺のことは分らなかったが、堂々たる遣唐使船の威容であった。遣唐使の史的説明や当時の船の解説、航海の記録なども展示されていて、なかなか充実している。

日本IBMは、現代の遣唐使でありたいというので、この船をつくったそうで、展示後は、是非当方へという申込みがすでにいくつもきているそうだ。

パビリオン通りを、当てもなく、ただぶらぶらと歩いているのもたのしいものである。

かつて万博のプロデューサーで、今またポートピアを手がけた人の話によると、この十年間で、日本人はすっかり行儀がよくなって事故が一件も起っていないという。それに服装が見違えるほどすっきりしてきた分だけ紳士淑女がふえたようで、パビリオン前の行列も実に整然としていて割り込む不心得者もなく、実に大人しいそうだ。それだけ成熟社会に入り、日本人の生活と意識が向上したのだろう。十年前は全盛だったハミリが影をひそめて、今では、まだ肩に重いだるうに、ビデオが全盛だということである。

十年一昔、万博は重々しかったが、ポートピアは、威圧感よりは親愛感にあふれていて、神戸らしくモダンでスマートで、すこし軽いが明るいものに仕上がっている。主催地に敬意を表して、兵庫縣館をのぞいてみると、兵庫県の歴史が一通り分って、こまかい統計などもよくそろっていた。出口近くにふるさと茶屋とか、“兵庫なう”といったコーナーがあつて、特徴は兵庫県各地の民芸品の出張販売をしていることだろう。

県下二十市七十町が交替に“おくにぶり”を披露するそうで、未来の先取りの多いパビリオン幻想から、やつと地上に、それも郷土にたどり着いた気分だった。

それは、いわば今様浦島太郎の旅のようなもので、いろいろ夢をみさせてもらったけれど、帰りつくのは、やはり故郷音頭というのが、いかにも日本的で、安心感を与えてくれる。